

中日漢字の異同に関する一考察

王 利 民

はじめに

中国人は漢字で中国語を書記し、読む生活はすでに五千年以上の歴史がある。

“日本人は、日本語を話し、聞く生活を日本列島に定住するようになった時代から行っていたはずであるが、斎部広成《古語拾遺》に「蓋聞、上古之世、未有文字、貴賤老少口口相伝、前言往行存而不忘」と指摘されているように、文字を有していなかったため、日本語を書記し、読む生活は、漢字が大陸から移入されるまでは不可能であった。”¹⁾

漢字が日本に移入されたのは紀元一世紀前後のことであることは一般視である。つまり、日本は大陸との交渉が始まってから、中国で作られ、使用されてきた表意文字——漢字は、日本に伝来し、日本語を表記するために使用されるようになった。

周知のように、現代日本語は漢字仮名混じり文で、漢字がたくさん使われている。母国語として漢字を使っている中国人は、日本語の漢字表記を見て、親しみを感じ、全く違う言語の難しさを感じない。

「なぜ日本語を勉強するのですか」と日本語科の新入生に聞いたことがあるが、「漢字を使っているので、英語などと比べて、簡単ですから」という答えであった。この答えには二つの認識不足がある。一つは中日両国語が近

い言語であること、もう一つは日本語における漢字は中国語漢字の字体と読み方、意味が同じだと考えていることである。しかし、三、四年間ぐらい日本語を勉強した人に「日本語と英語はどちらが難しいですか」と聞いたら、ほとんどの人は「日本語は英語より難しい」と答える。それは漢字がその難しさの一つであることが窺える。

文字が生まれたのは社会の需要によるものであり、従って、社会の変化、発展に伴って、それも進化し、発展してきたものである。中国から日本に輸出された文字は、それぞれの歴史的な事情により、独自の変遷をとげており、それは字体だけでなく、字音、意味なども異同が出てきたのである。現代中国語と日本語の漢字の相互の差異を明確に認識すれば、これからの日本語の勉強に大いに役立つだろう。

1. 字体の異同

1-1 国 字

確かに日本語における漢字の大部分は中国の漢字と字体も同じ、意味も同じである。しかし、日本の文字で、常用漢字表にある「込」「峠」「畑」などは漢字の要素があるが、中国語には存在しない。これらのような日本人が独自で作った文字は国字という。国字とはなにか、アメリカのアリゾナ州立大学教授のエツコ・オバタ・ライマンの《日本人の作った漢字》という本に次のように指摘されている。

“広義にとれば、国字とは「中国とは別に、異質の文化を持ち、一国を形成する民族が中国の漢字に影響されて、自ら創作した漢字体の文字」といえよう。従って、民族の言語とその表記意識によって、その文字の形も、方法も、発音も独自のものとなる。古代、表記法を持たなかったこれらの民族は自らの言語を使って耳と口で言語活動をしていた。つまり、言語は音の存在だけであった。そこに漢字という中国の文字が導入された。「記録する」ということを初めて知った古代人はいかに驚嘆したであろうか。表記法のな

かった古代の言語活動は今日の観点から言えば、「音が伝える範囲」「音であるから、再生の困難さ」「証拠とはならない不確さ」などのために非常に限られたものであった。中国から学んだ漢字は古代人にとって信じられないほどの魔力や魅力があったに違いない。そこで当初はこの有り難い文字を敬虔に正確に学ぶことに専念したと想像できる。やがて、これらの民族にとっての民族特有の漢字の便利な使い方や応用を次第に見出していく。国字は正にこういう状況の産物であると言えよう。”²⁾ 国字についての研究は十七世紀からで、《同文通考》《異体字弁》《和字正俗通》《国字考》《文教温故》《倭字考》《皇朝造字考》などに見られる。日本人は漢字の要素を利用して、日本特有の文字（国字）を作り始めたのは中世以後のことである。それは、日本人は漢字について、かなりの知識を持たないと作れない。“漢字が紀元前後大陸から日本に入ったのであるが、七世紀まで日本人が公式の場で漢字を用いなかった。七世紀に入ると日本人による漢文が明示的に登場したのである。”³⁾

「畑」を例にしてみると、“《新撰字鏡》（九世紀末）を見てみると、この文字の存在はない。次にずっと下がって室町時代の《節用集》文明本（一四九四以後）を見ると、「畑」が存在している。次に中間の《色葉字類抄》（一一四四～八一）を調べると、畚として存在がある。そこで「畑」は火田→畚→畑という過程を経たのではないか。時代的には九世紀末期から十二世紀中期に

その素地が出来、十五世紀には畑という文字が成立していたのではないかと”⁴⁾

一体、これまで日本人がどれぐらい中国の漢字と違う字体の国字を作ったかについては、確かな数字がないが、《日本人の作った漢字》によれば、少なくとも600字以上もある。

しかし、現在、日本人の日本語の漢字表記は一般には常用漢字表（一九八一年内閣告示第一号）によって、統制されている。その中に生存している国字はわずかに込、峠、畑、働、杵の五字に過ぎない。

ところが、日本人の苗字と地名に関する固有名詞に国字がたくさん生きて

いるのである。例えば、

地名に使われている国字の例

新潟にある杵差岳（えぶりさしだけ）の杵

広島にある杵原（むくはら）の杵

秋田にある下笹子（しもじねこ）の笹

福島にある大辻山（おおつべやま）の辻

愛媛にある鳴山（しげやま）の鳴

福井にある梶谷（すいだに）の梶

苗字に使われている国字の例

堀田（どいた）の堀，岡畔（おかさこ）の畔，梓子（するこ）の梓，迫田（はざた）の迫，翠宮城（ぐしみやぎ）の翠，蛙原（にいはら）の蛙，綱田（あけた）の綱，躑池（はすいけ）の躑，樋田（はいだ）の樋，堰代（せきしろ）の堰⁵⁾

一九八一年に常用漢字表が公表され、今後、漢字政策が変わらない限り、国字が生まれる可能性はほとんどないと考えている人がいるかもしれない。ところが、“一般民衆の社会生活の中では、必ずしも規範的とはいえない使い方が行われており、むしろ、そういうところに、現代日本人の漢字に対する意識や感覚の一端が窺えるように思われる。”⁶⁾

湯飲み茶碗に焼き付けた手作りの漢字：

「輻（モーター） 軟（パンク） 輻（カーラジオ）」

観光地の土産物屋で売っているのれんに染めた造字：

「姪（へそくり） 姑（うるさい） 姪（ふとい） 躰（ちまめ）」⁷⁾

などは、言葉の遊びで作られたのであるが、いつのまにか、中世以後に作った文字と同じように国字研究の素材になるかもしれない。漢字を見て意味が分かるということは、漢字が象形文字で、つまり、図形のようなものであり、一つの図形に一つの概念があるということである。仮名、アルファベットの

ような表音文字はそういう機能を持っていない。だから、これからも新しい図形——漢字が作られる可能性があるに違いない。

1-2 簡体字

1-1で述べた国字は、日本人の手で作った文字で、中国には存在しない。次は、中日簡体字における字体の差異について述べたい。

社会全体が遅れており、教育はまだ一般庶民まで普及していない時代は、漢字を習う人の大多数は、生活の余裕があり、時間があった金持ち、貴族階級の人であったため、漢字の字画が多くても、難しくても、漢字に対して改革せよという要求はなかった。ところが社会の変化、発展に伴って、国の富強をはかるために、先進的な科学、文化を学ぶことは、一般の庶民まで要求されて、初めて漢字に対する改革の要求は起こり始めた。歴史的な原因で、中、日両国の漢字の改革は違う方法、違う力点で行った。そこで、両国の漢字の異同がますます大きくなったわけである。いままで両国公表された簡体字の一部分を次の四種類に分けて、その相違を見てみよう。

a. よく似ていて、少し違う簡体字

中							日						
压	画	举	浅	实	称		压	画	举	浅	实	称	
单	团	边	恋	带	对		单	团	辺	恋	帯	対	

b. 差異の大きい簡体字

中							日						
亚	围	为	荣	驿	圆		亜	囲	為	栄	駅	円	
应	扩	乐	驱	气	俭		応	拡	楽	駆	気	儉	
儿	铁	龙	泪	劳	庄		児	鉄	竜	涙	労	荘	

c. 日本だけ簡体化した漢字

壹 仮 醉 弘 缶 恵

d. 中国だけ簡体化した漢字

愛 偉 運 級 喚 窮
軍 記 習 无 問 飛
濃 偵 創 隊 場 扑
頭 認 灭 聖 制 坛
陽 疗 麗 陸 邨 优

などがある。⁸⁾ このように、簡体字だけでも、それぐらいの相違があるが、要注意である。

中日両国の簡体字が統一されれば、両国の文化交流を深めることに対して、良いことではないかと考えている人がいる。それは、不可能ではないが、なかなか難しいことである。多くの人が当惑を感じるだろう。一番簡単な統一方法はただ一つ、それは、いままでの両国の簡体字を廃棄し、旧体字を復活するという方法である。周知のように、漢字を簡略した理由は、書きにくいことと覚えにくいことであるが、教育の普及に伴って、社会全体の知識水準が高くなった今日では、それは難しいことではなくなるのである。

2. 字義（意味）の異同

1で字体について述べたが、これから意味について調べてみよう。

日本語の全然わからない人と一緒に日本を訪問したことがある。朝食の場で“アメリカは日本に米市場の開放を要求しているが……”と新聞に載っていることを話してくれたことがあるが、中国語のできない日本人の友人は“北京第二外国語学院へ行く”と書いたら、タクシーの運転手にちゃんと送ってもらったことがある。日本語ができなくても、漢字を見て、大体の内容が推測できるということは“中国語の漢字が意味をもっていて、その意味が日本

語で基本的にそのまま受け継がれている。”⁹⁾というのである。“ただし、歴史の流れとともに、それぞれの言語において、漢字、漢語の意味に変化が起こり、そこに「ずれ」が生じている。日本語の「工夫」が韓国語では「勉強」の意味を持ち、日本語の「勉強」が中国語では「無理をする」意味を持っている。”¹⁰⁾したがって、漢字が日本語とほとんど同一の意味を表している場合、一部の意味を示している場合、そして、漢字の意味と異なった味づけがなされている場合などがある。

a. 同じ意味のもの

圧力 安心 外国 可能 危険 社会
東 南 山 川 日 月

これらの漢字と語は、中国語と日本語の語感が少し「ずれ」があるかもしれないし、そして字体の差異もあるが、同じ意味だと考えても、あまり支障はない。同じ意味のものの中には、中国に逆輸入した日本人が作った漢語も少なくない。これらの語は読み方が違うが、中日両国語では同じ意味である。

例：議案 航空 所得 被告 未成年 舶来 立憲

b. 一部の意味を示しているもの

無理 伯父（叔父） 淡泊 水道

以上の語は、中日両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれがある。例えば、「淡泊」は日本語では「濃厚でないこと。あっさりしていること」と「欲の少ないこと。さっぱりしていること」という二つの意味を持っているが、中国語では、「欲の少ないこと。さっぱりしていること」という意味しか持っていない。「水道」は日本語では、1, 船舶の航路, 2, 海または湖などの接近した陸地によって挟まれた狭い部分, 3, 上水道, 下水路という意味を持ち、中国語では、1と2の意味を持っているが、3の意味がない。3の場合、中国語では、「上水道, 下水路」そのまま使うか、「上水道」より「自来水」という言葉がよく使われている。

c. 中国語の意味と異なったもの

勉強, 利口, 手紙, 娘, 丈夫

例のような中国語と全然違う意味を持っている語は日本語にはたくさんある。日本語の「娘」は中国語では「母」であり、「丈夫」は「夫」という意味である。また、日本語の場合、独自で作った漢語のような語（和語）が多い。例えば、

案内, 一応, 近所, 心配, 世話, 返事

などがある。これらを見て、勝手に判断すれば、大きな間違いが起こる。「学生の世話をする」という文を書いて、「日本語は漢字を使っているから簡単だ」と言った日本語の全然分からない人に聞いたら、「これは学生に世界童話を話すか、学生に世の中のことを話すかのことでしょう」と答えてくれた。

このような理解しにくくて、判断できない語が多いが、それぞれの語の日本語としての意味を記憶の中に定着させることが、それほど難しいことではないが、「漢字があるから簡単だ」という考え方は危ない。

3. 漢字の字音の異同

1と2の字体と字義は中日両国語では「ずれ」があるということはすでに見てきたとおりであるが、もっとも「ずれ」がひどくて、中国人には一番困難を感じるのは漢字の読み方である。中国漢字は一字一音節で、その読み方は原則として一つである。読み方は二つ以上のもあるが少ない。しかし日本語の場合は一音節の漢語は多く二音節に発音されているし、読み方も多い。日本語の場合、字音のほかに字訓もある。字音には呉音、漢音、唐音（宋音とも言う）、慣用音があり、字訓には、正訓と仮訓（国訓とも言う）がある。呉音は一番最初に日本に伝わった漢字の音で、中国南方系の音である。漢音はその後移入された長安、洛陽を中心とした北方系の音である。唐音（宋音）は“鎌倉室町以後、禅僧や商人などの往来によって伝えられた宋、元、明の

音、更に江戸時代長崎通事などを通して伝えられた清音などの総称である。

「唐音」「宋音」というのは、唐代音、宋代音の意味ではなく、漢呉音に対して唐土の音の意味である。”¹¹⁾ 慣用音は呉音と漢音とが通い合って生まれた音である。字訓の場合は、漢字の中国語としての意味に当たる日本語がその漢字の読みとして固定したものである。そのために同じ漢字でいろいろの字音を持っている。漢字の「下」を例にしてみよう。

中国語の場合

下等 (xia deng) / 下等

下次 (xia ci) / 次回, この次

下行車 (xia xing che) / 下り列車

在他領導下 (zai ta ling dao xia) / 彼の指導の元で

時下 (shi xia) / 今, 現今

下山 (xia shan) / 下山する

下雪 (xia xue) / 雪が降る

下命令 (xia ming ling) / 命令を発する

下結論 (xia jie lun) / 結論を下す

下班 (xia ban) / 退勤する

鐘打了三下 (zhong da le san xia) / 鐘が三回鳴った

桶里装着半下油 (tong li zhuang zhe ban xia you) / 桶に油が半分入っている

坐下 (zuo xia) / 坐る

留下 (liu xia) / 引き留める, 言い残す

以上の例の中の「下」は名詞の中でも、動詞、数量詞として使っても、動詞の補助成分として使っても、字音は同じで、「xia」である。

ところが、日本語の場合は

下流 下車 下手 下期 下戻し

階段を下りる

手を下ろす

判決を下す

先生は本は下さった

温度が下がる

親の下を離れる

等の例にある「か げ した しも さげ もと おりる おろす くださ さがる」などがいずれも「下」という漢字の意味に当たる日本語の読み方である。中国語の (xia) という一つの読み方に対して、日本語の読み方はその十倍になる。

そのほか、日本人が独自で作った漢字（国字）は音読みがなく、全部訓読みであることに気をつけなければならない。

中国は広くて、地方によって、漢字の読み方は少しずれがあるが、五十年代標準語によって、漢字の発音が統一されている。日本語では、漢字の訓読みは統一される可能性がないが、音読みの場合は可能性があるのではないか。統一されれば、外国人にはもちろん、日本人にも簡単になるだろうと考えている人がいる。しかし、漢字は紀元一世紀前後日本に移入されて、もう二千年ぐらいになる。その間日本人が様々に工夫を凝らし、日本語の中に持ち込んだり、日本語の音節を示す仮名文字と漢字とを調和させたりしてきた。だから日本語の漢字はすでに中国語から分離して日本の文字になったと言える。そこまで日本の風土に化してしまった漢字の読み方を統一することは容易なことではない。

終わりに

現代中国語の漢字と現代日本語の漢字と比較してみると、かなりの違いが認められるのである。もとが同じなのにその異同はどのように生じたのであるかについては先行研究がたくさんある。同じ漢字を使っているから、それを統一しなければならないとか、漢字を廃棄して、世界共通の音標文字を作らなければならないとかいった説は賛成できないよりも、不可能である。問題はこれからその異同をこれ以上拡大しないことである。この問題に関する

共同研究は今後の両国学者の共通の課題になるだろう。

注

- 1) 佐藤武義《古代の漢字とことば》P 1
- 2) エツコ・オバタ・ライマン《日本人の作った漢字》P 59
- 3) 同(注1) 参照
- 4) 同(注2) P 87
- 5) 《日本人の作った漢字》参照
- 6) 斎賀秀夫《現代人の漢字感覚》P 11
- 7) 同(注6) 参照
- 8) 神谷 修《日・中漢字簡略化の比較》参照
- 9) 武部良明《日本語教育と漢字》P 43
- 10) 同(注9) P 44
- 11) 《わが国における漢字と漢語》参照

参考文献

《広辞苑》
《現代漢語詞典》
《漢字・漢語概説》
《文化交流と漢字》
《中日大辞典》